

University Academic Repository

Adaptation of War Brides to American Society : Between Two Value Systems

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2005-04-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Yasutomi, Shigeyoshi, Ueki, Takeshi メールアドレス: 所属: |
| URL | https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/133 |

戦争花嫁のアメリカへの適応について

～日本的価値観と欧米的価値観の狭間で～¹

Adaptation of War Brides to American Society: Between Two Value Systems

安富成良 植木 武

Shigeyoshi Yasutomi Takeshi Ueki

<要約>

本稿では、はじめに戦争花嫁のアメリカ社会への適応に関するこれまでの先行研究を吟味し、その分析枠組みを考察した。そして「エスニシティ (ethnicity)」を、場面、状況に応じて変化するプロセスとして考え、日本的価値観をもつ戦争花嫁の「エスニシティ」を基層にしっかり根をひろげたものとして捉えた。また移住先のアメリカの文化・社会・経済などといったものがどういう状況にあるのか、という外的要因である「コンテクスト (context)」を提示し、場面、場面での対応の「ストラテジー」について、われわれが実施した調査票調査やインタビューの結果を通して分析した。

我々の調査、研究を通し、戦争花嫁のアメリカ社会への適応を考える際に重要な要因となる戦争花嫁の価値観については、戦争花嫁の基底には「日本的価値観」があり、上層に文化変容を通して身につけた「欧米的価値観」があるとし、その中間層に場面や状況、テーマなどによって変化する第三層が存在する、という三重構造を、いくつかの事例を通し明らかにした。

<キーワード>

戦争花嫁、アメリカへの適応、コンテクスト、エスニシティ、ストラテジー、日本的価値観、欧米的価値観、三重構造

はじめに

戦後60年が過ぎ、戦争花嫁、と呼ばれる日本女性が異国の地に初めて渡って半世紀以上が経過している。これらの日本女性は敗戦後、日本に進駐してきた連合軍の兵士・軍属と結婚をし、夫の国に移住した女性であるが、最初の結婚が行われた1946年から1959年までには4万から5万ともいわれる日本国籍の女性が海を渡り、夫の国へ移住した。

アメリカに渡った戦争花嫁の場合、1947年の日本人花嫁法の施行以降、徐々に渡米する数も増加したが、その多くは1950年6月に勃発した朝鮮戦争以降に渡米している。また本稿

ではほとんど論じないが、オーストラリアに渡った戦争花嫁の場合は1946年2月から1957年11月までに、中国・四国地方に駐留したオーストラリアを主力とする英連邦占領軍 (British Commonwealth Occupation Force) 兵士と結婚した女性である。オーストラリアへの入国が最初に認められたチェリー・パーカー (旧姓桜元信子) さんの場合は、同国政府に入国を申請してから4年後の1952年に渡豪が認められ、その後1957年までに約650人の戦争花嫁が渡豪した (植木他、2000:86)。

本稿は1996年から1998年まで植木、新田、鈴木らがアメリカ本土、ハワイ、オーストラリア及び福島で実施した調査、1999年に安富がロサンゼルスで実施した調査 (いずれも調査票調査と面接調査を実施)、更に2004年に植木と安富が参加した日系国際結婚親睦会主催の「第5回国際結婚交流世界大会」(ハワイ)、また同年、安富によるロングビーチで実施した面接調査なども交えて、日本人戦争花嫁の移住先の国 (本稿ではアメリカに限定) における適応問題に関して、「言語」、「価値観」、「交友関係」、「生活の満足度」、「宗教」などという側面から先行研究を踏まえて論考を加えたものである。

本稿において戦争花嫁に関する先行研究や、1996年以降の植木、安富らの研究成果、更に植木他 (2000) の示した「性格分析」(鈴木) や「生活構造の持続・変容過程の分析」(新田) も加味して、戦争花嫁の価値観が「欧米的文化価値観」と「日本的文化価値観」のどちらか一方が突出しているのか、両価値観が二重構造で重なり合っているのか、といった二つの文化のパラダイムの間での問題を検討し、戦争花嫁にとっての移住先での適応問題についても明らかにする。

I. 先行研究にみる戦争花嫁の適応問題について (安富)

1) 1950年代の中西部における戦争花嫁の適応に関する調査、研究

日系の戦争花嫁について、第二次世界大戦後、最初の研究論文として発表されたのはシカゴ学派の社会学者 Strauss (1954) の論文である。「日本人戦争花嫁に見る緊張と調和」と題したこの論文は、シカゴ地区に在住する45人の日系戦争花嫁夫婦グループ (うち30名は日本女性と結婚した白人のアメリカ軍兵士・軍属、残り15名はその白人アメリカ軍兵士・軍属と結婚した日本人妻) と、他の非白人アメリカ人兵士・軍属と結婚した日系戦争花嫁グループの人たちの調査結果も交えて、結婚生活の安定性などに関して調査したものである。

Straussはこの調査、研究で戦争花嫁夫婦の場合、通常、異人種間結婚をした人たちが大混乱を引き起こしがちな宗教の問題、制度上の問題、又は家族の絆の強さなどといったことにより引き起こされる問題性をアメリカ人の夫も日本人戦争花嫁も持っていなかった、ということ明らかにした。そして日系戦争花嫁夫婦グループの場合は通常、非日系同士の異人種間結婚者より結婚生活に関して安定性を持っていて、結婚生活への適応もなされている、とす

る一方、もし緊張や失敗が今後あったとしてもそうした事の原因は文化的差異や人種偏見とは関係なく、国際結婚をした若い夫婦がよく直面するような問題（異国の地で感じる孤独感や緊張感など）や法的な面や政治的な状況、といったものに起因することが多い、と結論づけた。

1950年代に渡米した戦争花嫁のアメリカへの適応状況を調査した同様の研究として、Straussの研究の1年後に発表された Schnepf & Yui (1955)の研究がある。この研究では「戦争花嫁カップルの日本での出会いが偶然で行き当たりばったりであり、付き合う期間も短かったであろう」、また「妻が文化的な違いに戸惑い、アメリカ社会への適応が難しいであろう」ということを仮定し、こうした理由からこの国際結婚は失敗に帰することが多いだろう、という仮説をたてて、セントルイス（15組）とシカゴ（5組）の戦争花嫁カップルへの聞き取り調査を行い、その仮説を実証しようとした。インフォーマント夫妻の結婚時の平均年齢は夫が26歳、妻が23歳、夫の平均在日滞在期間は4.5年であった。夫妻の両親が結婚について反対した理由としては文化的な相違により結婚生活が上手くゆかないのではないかと危惧したこと、最初の出会いは夫の職場が多かったこと、両者間にはコミュニケーションの際に言葉が障害となった点はあるが、夫は妻を支配しようとしているのではなく協力して助け合ってゆこうという姿勢が見られる、といったことが明らかにされ、調査全体を通し日本人戦争花嫁は仮説に反してアメリカ社会への適応に関しての問題は少なく、アメリカ社会へ順調に統合されてきている、と Schnepf & Yui は指摘した。

この2つの論文は共に宗教、言語、文化面での違いが余りにも大きすぎるといった理由や異人種間の結婚は同人種間の結婚に比べより精神的なストレスを生じさせ、国際結婚者を守る制度的な面での防波堤となるものが少ないといった理由で国際結婚のカップルのほとんどが破綻していると一般的に言われている考えに疑問を提起した論文であるが、被調査者（特に国際結婚した日本女性）が少なく、冷戦時代を迎え、保守化傾向が強まったアメリカ入国当時の新たなアジア人の大量入国に対する人種的不寛容についての論及がほとんどなく、あまりにも戦争花嫁のアメリカでの状況把握が楽観的過ぎる点は否めない。しかしそういった欠点はあるものの Strauss と Schnepf & Yui の調査は共に中西部の大都市に定住した日本人戦争花嫁に対して面接調査をしたもので、日系社会との関わりというより、アメリカ社会そのものへの適応や結婚の満足度を調査したものであり、渡米直後の日本人戦争花嫁のアメリカ社会への適応状況を把握するには好論文である。

ここで1955年にミシガン州デトロイトのコミュニティ・サービスを促進する機関である International Institute of Metropolitan Detroit（以下、I.I. と略す）が実施した調査について、日本語の分かるケース・ワーカーとして参加した田部俊子が「日本人の戦争花嫁の問題」（1962）と題して論じたことについて付言する。この調査はデトロイト及びその周辺に居住する106組の日本人戦争花嫁カップルのうち90組（うち夫が白人のケースは61組、黒人が27組）を対象にして実施された。調査項目は知り合った方法、結婚式の種類、両親の結婚

に対する態度、結婚した年、夫妻の年齢と年齢差、教育年数、結婚前後の宗教、子供の数・年齢や子供と話す言語、その他多岐に渡っており、インタビューを中心に実施された。

この論文は当時の中西部の大都市部に居住する日本人戦争花嫁について知る大変貴重な調査報告であり、被調査者数も多く、多岐にわたる調査項目、表1から表34で示された調査結果など大変示唆に富む論文である。田部自身がケースワーカーとしてインタビューに加わり、問題を抱えた戦争花嫁の相談相手となり、その結果をもとに記述している。

ソーシャルワークサービスの一環としてケースワーカーらがこの調査を実施した目的の一つが、「戦争花嫁の実際の問題を学び一番適した援助手段を見出すこと」(田部、1962:122)であるため、後学の者には非常に貴重な調査結果を提供してはいるものの、それぞれの調査項目についての社会的、文化人類学的な視点に立った分析が深められておらず、単なる事実の羅列に終始している部分が多いのが残念である。またこの論文はこの調査実施の6年～7年後に日本の大学の研究紀要に掲載された論文だが、この調査結果の詳細がI.I.のスタッフや研究者によってデトロイトで発表されたのか、(調査時との時間的な経過を考慮すれば)その後の調査、研究はどうなったのか、といったことが記載されておらず、注や参考文献一覧も一切掲載されていない。非常に貴重な調査結果を明らかにした論文であるだけに、こうした点は返す返すも残念である。

2) 1970年代以降の戦争花嫁の適応に関する調査、研究

日本人戦争花嫁の結婚生活の安定性について Connor (1976) は、1960年代後半から1970年代のはじめにかけてカリフォルニア州サクラメント近郊に住む日本人戦争花嫁夫婦20組と5人の離婚した戦争花嫁を対象に調査をした。この調査では直接、被調査者夫婦及び離婚した日本人戦争花嫁と平均2時間面談し、夫婦には2種類の調査票の質問にそれぞれ共同で答えてもらう方法を用いた(Connor, 1976:6)。「結婚調査票 (Marital Information Form)」は被調査者の属性、夫婦の結婚時の年齢、結婚前の交際期間、結婚が許可されるまでにかかった期間、調査時の職業と宗教、家庭での食事や家庭内で使われる言語、夫側の家族と妻の関係、差別・偏見の体験の有無、物の考え方など32項目の質問事項から構成されている。また「結婚順応調査票 (Marital Adjustment Form)」は Ernest W. Burgess、Leonard S. Cottrell らの作成した結婚順応度調査票を参考にして作成したものであるが、Connor は日本人戦争花嫁と結婚した夫と結婚年数及び経済状態が類似した白人夫婦の夫20人を被調査者として抽出し、このグループの白人男性と日本人戦争花嫁の夫20人との結婚順応度の度合いを比較研究した(Connor, 1976:6-7)。

Connor は「日本人戦争花嫁とアメリカ兵との結婚は、人種的、宗教的、文化的な差異が大きな障壁となって不安定になりがちである」という仮説を立ててこの調査を実施した(Connor, 1976:6)。しかし平均年齢が夫26.5歳、妻23.5歳で結婚したこの20組の夫婦の場合、家庭生活、子供の教育、経済的な基盤なども特に白人同士の結婚者と比べても問題はなく、

宗教や文化的背景の違いから不安定な人間関係に陥ることも顕著には認められず、夫の家族との関係も良好なケースが多く、少なくともこの20組の日本人戦争花嫁夫婦の結婚生活が不安定であるという仮説はあてはまらない、と結論付けた (Connor、1976:65)。

また離婚した戦争花嫁の5人のうち4人の離婚理由は人種、宗教、文化の違いからではなかった点をあげていることから、Connorは上述の仮説が間違っていたと論じた。この研究は多岐にわたる質問項目を設定し、広い角度から文化人類学的手法を用いて結婚生活のみならずアメリカ社会への適応、同化という観点からも調査したものであり、離婚した戦争花嫁への調査のみならず、アメリカ白人夫婦の夫への調査も実施し、総合的に戦争花嫁研究を行った点が非常に評価できる。また実際に使用した調査項目のすべてを付録で紹介し、その調査結果についても具体的に数字をあげており、後の研究者にとってはきわめて有益な研究である。

しかし Connor 自身が指摘している被調査者数が少ない、といった点もさることながら、調査時に夫婦で2種類の質問票に沿っての質問に答える方法をとったため、答える際に自然とお互いに相手の立場も考慮に入れながら答えたことも十分想定され、正確な実態が浮き彫りにされない点があげられる。例えば夫婦の友人に関する質問項目28で、「あなた方は戦争花嫁の友人や日系アメリカ人(二世)の友人よりアメリカ白人の友人の方が多いですか？」の問いに対し4組のみがNo、2組が半分半分、その他14組(70%)がYes、と答えているが、もしこの質問を日本人戦争花嫁に単独で聞いたら、「日本人、日系人」という答えが返ってくるのは想像できる。Connorは後に、『日系アメリカ人の3つの世代における伝統と変化』(1977)において、こうした欠点を改善した質問票を作成し、興味深い研究を行ったが、こうした緻密な研究方法で戦争花嫁の結婚生活の安定性についての考察が為されなかったのが悔やまれる。

Kim (1977) は、アメリカ兵士・軍属と結婚しアメリカに渡ってきた20万人のアジア系戦争花嫁が、言葉や習慣の違いからアメリカ社会への適応に困難をきたし、寂しさや時には夫も含めた周囲の無理解から受ける精神的、肉体的な苦痛に苦しんでいる実態を明らかにした。そして彼女たちが抱えた問題に対してケアをしてくれる施設や行政側の体制が整えられるべきであるとソーシャル・ワーカーとしての立場から論じた (Kim、1977:100)。Kimはまた、戦争花嫁の結婚生活の安定性や順応に関するこれまでの研究に対し、調査対象地域や被調査者数に偏りがあり、夫の役割についての分析がなされていないと批判している。Kim自身は1958年(ソウル)、1961年(ロサンゼルス)、1964年～1972年(アメリカ国内の数ヶ所)の3つの時期にわたり48組の韓国系戦争花嫁夫婦と18名の日系及び韓国系戦争花嫁に面接調査をした。そこで面談した韓国系・日系の花嫁に共通する点として、故国の家族、コミュニティは概して米兵との結婚に対して冷淡で懐疑的であり、こうしたことから、多くの花嫁は疎外感に悩まされたことを指摘している。更にアメリカ軍そのものも当時、国際結婚を奨励しない傾向があり、基地関係の仕事に従事していた女性が結婚を決意した場合、その後の

職場の反応はその女性に対して冷淡で、こうした諸々の周囲の否定的な反応に女性たちは孤立し、疎外感を抱いたことも多かった、と指摘している (Kim、1977：96-97)。

これまでの研究は一般的に「米兵との国際結婚の多くは文化的、社会的な障壁の為に不安定になる」と考えられていることへの疑問から、これらの考えを検証し、「結婚生活は不安定ではなく、上手く順応している」といった結論に達する研究が多かったが、社会事業を教える大学の教員として、また社会事業家としてこうした女性たちに長年接してきた経験や調査から、Kimはこれまでの調査研究とは異なった視点からアプローチした。花嫁が異国で疎外感や不安に悩まされたときの最大の理解者であるべき夫が、妻の苦しみや問題をどう捉えるかが最も重要であるにもかかわらず、こうした時に夫が無理解で非協力的であり、時として暴力を振るうこともあるということを面談で妻が訴えるケースが比較的多かったとKimは述べている。

またアメリカ社会への適応に際しては言語の問題が非常に大きなウェイトを占めていて、花嫁に対しての多言語・多文化理解の教育やそれを行う施設の充実の重要性を繰り返しこの論文の中で力説している。Kimは、今後こうした問題に対し決して悲観的になる必要はないが、地域社会や連邦及び地方の行政当局がこの問題にもっと真剣に取り組まなければならないと結んでいる。この主張は韓国系・日系の戦争花嫁についての長期にわたる参与観察を踏まえてのものであり、非常に説得力がある。

日系アメリカ人の適応に関する研究で本多千恵は、戦争花嫁の適応を考察する際に示唆に富む論考を提示している (本多、1991：9-19)。そこでこの項の最後に本多の示した考察を以下で概括し、その上で戦争花嫁の適応に関する研究の方向性を探りたい。

アメリカ社会への適応を考える場合、その分析枠組みはこれまで、R. パークやM. ゴードンによって体系化された「同化理論」(文化及び微視的な人間関係といった第一次的構造の分析を重視)、M. ハンセンによって明らかにされた「世代理論」(日系、ユダヤ系といったエスニック集団による分析ではなく一世、二世、といった世代によって分析する概念)、そしてE. ボナキッチ、H. キタノらによって構築された「ミドルマン・マイノリティ理論」(アメリカ史の中でエスニック集団は支配者集団と被支配者集団の間に組み込まれ、スケープゴートとしての役割を果たすことによってその適応が方向付けられるとする理論)がある、と本多は指摘した。

しかし戦争花嫁のアメリカ社会への適応を考察する際に注目しなければならないのは、同化理論の枠組みで一般的に考えられる同化段階のうち「文化的・行動的同化 (cultural and behavioral assimilation) から「構造的同化 (structural assimilation)」、「婚姻的同化」(marital assimilation)へと移行するプロセスは該当しない、という点である。まず先に日本で両者(アメリカ兵士・軍属と日本人女性)の接触 (contact) があり、愛情が芽生え、国際結婚をし、夫の国に渡り、そこで「文化的・行動的同化 (cultural and behavioral assimilation)」が進行し、徐々に文化変容 (acculturation) がなされた、と考えるのが妥当であるからである。

また「世代理論」も「ミドルマン・マイノリティ理論」も戦争花嫁の場合は分析枠組みとしては説明ができない。むしろ本多が日系アメリカ人の適応を考察する際に当てはめたアメリカにおける外的要因や社会状況といった「コンテキスト (context)」、出自社会である日本の文化や価値観、成員間（この場合戦争花嫁同士又は日本人・日系人同士）の連帯や日本人・日系人集団への帰属意識といった「エスニシティ (ethnicity)」、そしてその両方の概念を見据えてより望ましい選択が出来るように意図的に行動を選択したり、場面や状況に応じて言動を使い分け、操作するといった「ストラテジー (strategy)」を念頭に置いた考察が戦争花嫁の場合においても肝要である。

そこでこれまで概観した先行研究を念頭において、我々が1996年以降調査、研究してきたことを以下に示し、我々の調査結果で明らかになったことに基づき、戦争花嫁のアメリカ社会への適応についての分析枠組みを提示したい。

II. 1996年から1998年までの調査研究を中心に (植木)

1996年より3年間、文部省科学研究費補助金(国際学術研究)の支給を受け、戦争花嫁を対象に調査を行った(課題番号 08041084 代表 植木 武)。その時の調査は3部構成からなっていて、ひとつは、彼女らがどのように夫と出会い結婚し、そして現在何をしているか等を聞く一般質問アンケート、ひとつは性格分析で、YG 性格検査とTEG(東大式エコグラム)調査(145名)、最後はインタビュー調査(被面接者計36名)であった。本稿では、最初の一般質問アンケート調査の結果に絞り報告をしたいと思う。

そもそも戦争花嫁とは誰かという定義の問題であるが、われわれは、「……第2次世界大戦終結から1959年(昭和34年)までに、外国人兵士あるいは軍属の男性と結婚した日本人女性を日本人戦争花嫁と定義……」した(植木、2000:4)。なぜ1959年までであるかということであるが、60年代のはじめはケネディ政権下で、既にベトナムへ渡るアメリカ兵が日本に沢山いて、その頃に結婚する国際カップルと区別するためであった。つまり、戦争花嫁とは、終戦直後の国民皆空腹でヤミ市場が繁盛した食糧不足時代から、朝鮮戦争の影響で急に日本経済が特需景気に沸き、それから数年間、やっと少しずつ地に足のついた復興を始めた頃までに、アメリカ兵やオーストラリア兵と結婚し、それぞれ夫の国へ移民していった日本人女性と考えたからである。そこで、この期間に限るなら、他稿において戦争花嫁の数はアメリカへ渡った方々が約4万5千人、オーストラリアが約650名、カナダとイギリスがそれぞれ若干名と推定しておいた(植木、2000:5)。

一般質問アンケートは無記名用紙で、有効回収数が109、大きな質問が自由書きを含めて17問あった。すべては紙面の都合上から発表できないので、アメリカへ渡った戦争花嫁に限り、関心をひかれると思われる質問のみを、ごく簡単に紹介したい。

日本語について現在の彼女ら自身の自己判断によると、話す読むは、日本人とほぼ同程

度と答えた方がそれぞれ62%と68%、ただし書くとなると、日本人と同じ程度が51%と低くなった。多くは終戦の前後に女学校を出ている世代の方々に、その後外国生活が長いわけであるから書く力が劣っていても不思議ではない。ただし、同世代日本人女性（つまり、日本人女性75歳前後）に聞いても、同じ傾向は出てくるものと推測している。

彼女らの英語力について質問すると、ネイティブと同じが12%、やや弱いが50%、弱いが28%、大変弱いが6%、無回答4%であった。これは自己評価であり、他者がとやかく言う理由はないが、かなりの本人による希望的観測とプライドが入っている数値である。「心の持ち方」を聞くと、日本人の考え方とアメリカ人の考え方とが半々になった。

国民性調査にある「先祖を尊ぶ」かどうかを聞くと、うやまう方が63%、普通28%、うやまわない方4%、その他2%、無回答3%となった。同世代の日本人（男・女とも）は、尊ぶ90%、普通10%である。かなりの相違がみられた。「大切なこと」という、同じく国民性調査の質問（2つ選択を合算）を聞くと、親孝行42.5%、恩返し47.7%、個人の権利の尊重51.0%、個人の自由の尊重42.5%であった。これに対し同世代の日本人（男・女）は、親孝行74.5%、恩返し56.4%、個人の権利32.7%、個人の自由30.9%である。親孝行に大きな違いが見られるが、これは、地理的にも離れていて、したくてもできなかったという理由も入っているかも知れない。また個人の権利と自由では、ステリオ・タイプにピッタリ合致する日米の相違が出ている。「社会の成功」も国民性調査の質問であるが、「個人の才能や能力」が77%（日本人42.6%）、「運やチャンス」5%（日本人45.4%）であり、これも、面白いコントラストを示してくれた。

国際結婚して良かったか、を聞いてみた。「はい」が85%、「いいえ」が7%、無回答8%。なぜイエスか自由書きしてもらおうと、女性に親切、思いやりがある、優しい、寛大、礼儀正しい、責任感がある、平等、尊敬できる、愛してくれた等である。なぜノーかと自由書きしてもらおうと、言葉の違い、コミュニケーション・ギャップ、習慣の違い、酒好き、働かない等であった。もう一度生まれたら、どこの国の人と結婚したいかと聞いてみた。日本人と答えた方が19%いて、アメリカ人が48%、無回答が33%となった。死後もアメリカの土に眠りたいか質問すると、「はい」が78%、「いいえ」が13%、無回答が9%であった。その他に、年齢（現在2005年に換算すると、平均年齢76歳）、国籍、出身地、最終学歴、知り合った年、結婚年、結婚場所、夫との出会い方、結婚時の職業、子供の数、孫の数、自由書き等、たくさんのデータを獲得している。

ここからは、私どもが彼女らと10数年にわたりおつき合いさせて頂き、面接調査や性格診断調査等も含めて収集した調査結果を、一般的に述べてみたい。科学研究費報告書（植木・新田・鈴木他、2000：160-170）にまとめてみたが、それを更に簡潔に要約してみる。

調査以外でも、彼女らとはパーティーとか会合とかで話し合うチャンスが多かったが、「自分の思っていることはハッキリ言わなければダメ！」「グズグズしているのが一番ダメ」とか、「こっちは人間関係が、アッサリしていて良いわよ」「人の目を気にしないで済むからラ

ク」などと彼女らはよく言う。当然ながら、このような考え方は日本文化と比較してという前提に成り立つものであるから、アメリカという文化に「文化適応」あるいは、「文化変容」したから、と考えると良いかも知れない。しかしながら、終戦直後に、両親や親類の反対を押し切って、言葉や文化の相違を乗り越え夫の国へ渡ったモダン・ガールズたちが、加齢を経て自然に身につけた生活の知恵からかも知れず、それならば、同年代の日本人女性も同じことを言うであろう、という解釈も保留しておこう。

彼女らの結婚は、1947年を皮切りに始まり、1952年にピークに達し、その後、1959年まで徐々にその数を減じていった。結婚時の平均年齢は、日本人妻24.5歳、外国人夫26.7歳であった。子供は1～5人で、平均2～3人である。

夫との出会い方は、職場が43%、知人の紹介が34%、家族の紹介が3%、その他（無職・無回答）20%であった。「職業接近」論に合致する数値で、特に変わったことは無い。結婚当時の彼女らの職業を聞くと、ハウスマイド、ウエイトレス、タイピスト、事務員、洋裁師、PX店員、会社員、銀行員、店員となる。特に多かったハウスマイド、ウエイトレス、タイピスト等は、基地内の仕事であり、職場接近論が正にこれに当たる。

戦争花嫁の性格の特徴を明らかにするため、2種類の性格調査を導入した（YG調査表とエゴグラム調査票）。彼女ら145名と、コントロール・グループとして同世代の日本人女性62名にも両調査表に回答してもらったので、その比較結果も簡略して報告する（鈴木、2000: 93-144）。

YG法からは、情緒安定で社会的適応も高く、やや内向的な人が多いことが解った。YG法プロフィールから述べると、情緒が安定し、明朗で活動性が高く、抑うつ性が小さい。エゴグラム・パターンからは、世話焼きタイプでボランティアタイプが多い。エゴグラム・プロフィールからは、優しく母親的であるが、同時に自己主張できるタイプであることが判明した。

戦争花嫁と日本人女性を比較すると、似通うところも多いが、顕著な差も露呈した。つまり、両者とも情緒的に安定し社会的にも適応しているが、違いは、前者は格段に「世話焼きタイプ」が多く、後者には内向的で消極的でおとなしい方が多い点である。

戦争花嫁たちが、約半世紀前に結婚に踏み切る際、いくつかのハードルがあった。一番は両親からの反対であった。ほとんどのケース、少なくとも当初は、両親が大反対した。ひとつのエピソードは、母親が「そんなに外人と結婚したいなら、私を殺してから結婚してくれ」と言われたそうである。あるケースでは、おじさんから「結婚しても良い。でも、子供たちの将来もあるので、二度と敷居を跨がないでくれ」と言われ、「よし、二度と日本に帰ってやるものか、と思った」と聞いた。

障害は、アメリカ側にもあった。詳細は前提書（植木、2000:6-8）に譲るが、1947年になってアメリカ政府が日本人戦争花嫁の入国を許可し始めるが、当初は軍の内規も含めかなり厳しいハードルがあった。もちろん、夫の家族からの反対もあった。

夫の国へ移住した彼女らは、言葉と文化を学ぼうと懸命に努力した。子供たちが差別を受けないようにと、家庭内の母と子の会話も意識して、慣れない英語にした。永住権はもとより国籍も、全員が移住してすぐに取得した。

差別に関しては、ほとんどの方々が経験しなかった。個人的に、夫のおばあさんや妹たちから冷たい視線を投げかけられたという程度の話はあるが、これは、日本人同士の結婚にもよくある話である。ところが、例外として明白に受けた差別は、戦前に移民した日系一世と二世たちからであった。戦前に渡米した日系人達は、日本にいる親戚やマスコミから戦争花嫁に対して既に悪いイメージを作り上げていた。しかも、自分たちが白人社会と距離をおき静かに暮らしてきたのに対し、20代の若い日本人女性がアメリカ人の妻として、そのままアメリカ社会に溶け込むのを見て、何か心に覚えたことであろう。一世たちが初めてアメリカへ移住し、どれ程に苦勞したのか戦争花嫁たちは知らない。また、戦時中は一世と二世がキャンプに入れられ苦汁を飲まされ、そのため二世が志願して軍隊に入り、ヨーロッパ戦線でどれ程活躍し、日系移民の名誉回復に尽くしたか、知って欲しかっただろう。

もうひとつの差別は、日本のマスコミからであると彼女らは言う。日本の週刊誌等に掲載された戦争花嫁に対する悪口や批判的な記事に対し、彼女らは激しく反発する。アメリカ社会に入って大変苦勞したお涙頂戴的な記事でさえ、「私たちはそんな苦勞した覚えはない」と反論する。マスコミの同情的なコメントに対してさえ、過敏に反応するのだ。

戦争花嫁たちは、子育てで苦勞した。子供が言葉で差別されないように、喋れる限り家庭では英語でコミュニケーションをとり、一方、夫の話す言葉は辞書を片手に理解しようとした。子供の躰は、日本人的「正直さ」や「礼儀正しさ」を中心に教えた。その結果かどうかは一口で言えないが、子供たちの中には、医師、弁護士、大学教授、中学・高校教諭、会計士、公務員、薬剤師、軍人、エンジニア、銀行員などになって活躍をしている者も多い。

子育てが一段落すると、彼女らは仕事を捜した。大学へ入学して会計士や公認会計士になった方もいる。他には、銀行員、美術教師、通訳者、ガイド、レストラン経営者、美容院経営者、スーパー経営者、日本製品を売る雑貨骨董店経営者、新聞配達員、店員等である。しかし、それも65歳を超え、停年退職したり、店は息子や娘にまかせ、現在は孫の世話をする悠々自適の身分である。

アメリカ社会に溶け込もうと長年にわたり努力してきたが、年をとるにつれ、個人的おつき合いは言葉のハンディが無い同じ境遇の戦争花嫁のグループに集中した。仲良しでグループを作り、川柳、墨絵、歌舞伎、詩吟、日本舞踊、カラオケ、お茶、お花、仏教寺院、キリスト教会、お年寄りを世話するボランティア・グループ、日本人会等と、日本の同年代の方々ではとても考えられないぐらい多数のグループに属し、月曜から土曜まで、毎日忙しく飛び回っている。

戦争花嫁たちが、どのような日本観を持っているのであろうか。日本に住みたいですか、と質問するなら、ほとんどの方々が「いいえ」と答える。子供や孫達がいる限り、日本に戻

ってくる気はさらさらない。日本は物価も高く、年金生活では現状のレベルを維持できないことを知っている。趣味の会の人達と分かれるのはつらくて出来ない等、日本へ戻りたくないいくつかの理由が考えられる。

では、日本はどうしても良いのかと聞くと、それは違う。夫の国で、日本のこと、日本人に対する批判を聞けば立腹し、強く反論するが、しかし、日本で夫の国の批判を聞けば、同じく腹立たしい思いになる。彼女らは、正にアンビバレントな気持ちにあるのだ。つまり、ふたつの祖国に揺れる心を持っている。ただし、彼女らの日本観は、やはり半世紀前の終戦直後の日本のイメージをもっている。最近の若者達の風潮は、大嫌いである。我々日本人よりも、ずっと大きな嫌悪感を持っている。数十年前に日本を離れたことと、結婚した相手がアメリカ軍人であったことから、文化や国家に対する考え方は、かなり保守的な方も多い。そして、長幼の序を重んじ、質素儉約を美とし、信義を重視し、義理・人情を尊ぶそんな日本文化を誇りに思っている。

彼女らの心には、現在の日本人より古風な考え方が存在する一方、アメリカという国で文化変容を遂げているせいか、欧米流の個人主義と合理主義が浸透している。個人の権利や自由を尊重し、社会的成功は運やチャンスではなく、個人の努力であると強く信じているところは、同年輩の日本人女性とかなり相違する点である。

では、最後にその古風な日本的価値観と欧米の個人的・合理的価値観が、どのように混在しているのか考えてみよう（植木、2000：167-169）。メルティング・ポットと言われるように一体化しているのかと聞かれれば、そうではないと答えたい。サラダ・ボールのようなモザイク状かと聞かれれば、そうでもないと答えたい。私どもは、もっと単純に、二重構造を考えている。つまり、基層に日本文化があり、上層にアメリカ文化が乗っている二重構造を考えている。

古風な日本文化に実利的な欧米文化が乗っているなら、その接触面はどうかと問いたい。この接触面は、上層と下層を明確に区別している面かと問われれば、それは違うと答えたい。グラデーション状になって、つまり漸次的に変化されているのかと言われれば、これも違うだろうと答えたい。むしろ、テーマごとにブロック状になっていて、ブロックごとに日本的な傾向、欧米的な傾向に、個人差をもって色分けされているのではないだろうかと考えた。解り易く言うなら、ある人は、宗教は日本的な仏教、人間関係は煩雑さを避ける意味で欧米風、政治は平和を強く愛するゆえに日本的などと、個人により程度の差はあるが、テーマによってふたつの文化を使い分けているのではなからうか、と考えた。つまり、二重構造というが、このブロック状になった接触面を数えると、計三重構造になっているのではないかと考えている。

この三重構造は、短期間に仕上がったものではない。夫の国へ渡った当時は、とにかく言葉や文化を一日も早くマスターし、夫の国の市民になりきろうと精一杯頑張ったのである。しかし、完璧には達成できないことを自覚する頃になり、風の便りに日本の経済が奇蹟の復

興を遂げ、夫の国の経済に比べて見劣りしなくなると、母国日本に対し自信がもてるようになり、「ゆさぶり返し」現象を起こした。この過程を半世紀かけて経た結果出来上がったのが、上述の三重構造と考えたい。

Ⅲ. 1999年に調査した研究を中心に（安富）

1999年10月23日から25日までカリフォルニア州ロサンゼルス近郊のトーランスで開催された第三回国際結婚交流世界大会で筆者（安富）は「日系女性国際結婚者の生活と日系社会に関する調査」と題した調査票調査を実施し、アメリカ在住の78名とオーストラリア在住の9名の計87名の戦争花嫁の方、そして出席した戦争花嫁の夫にも英文での調査用紙に回答していただいた。本稿では戦争花嫁のアメリカ社会への適応問題を中心に論じるため、78名のアメリカ在住の戦争花嫁の調査結果のみを抽出し、これまでの先行研究で示された調査も参考にして戦争花嫁のアメリカ社会への適応問題やアメリカ社会への適応に大きな影響を与えたと考えられる戦争花嫁の価値観について考察する。

この調査票調査ではインフォーマントの属性を問う質問項目も含めて29項目について筆答していただいた。個人の思想・信条にもかかわる質問（例えば宗教などについて）や夫の人種について問うような質問項目は通常、質問事項には設定しないが、この調査票では戦争花嫁のより内面の問題やアメリカでの差別・偏見の体験の有無を調査する場合、避けられない要因として人種の問題が影響していると考えられることもあり、敢えて質問項目に加えた。幸い、この大会を主催した日系国際結婚親睦会のスタウト会長にもこうしたことをご理解していただいて調査実施前の趣旨説明に加わってサポートしていただいたこともあって、非常に協力的にこの調査は進められ、調査票もスムーズに回収された。²

日本的価値観と欧米的価値観に対する考え方の一例として、日本の家父長制に対して戦争花嫁がどのように感じていたのか、ということについての質問項目を設定したが、アメリカ在住の参加者78名からは次のような回答を得た。

Q. 13：結婚前の日本の封建的な社会をどう感じていましたか？

- a. 非常に嫌だった（18%） b. 嫌だった（31%） c. 特に嫌と感じていなかった（48%）
無回答（3%）

Q. 15：配偶者の家事の参加について、該当するものに○をつけて下さい。

- a. 全然しなかった（22%） b. 頼まれたらした（22%） c. 自分から進んでした（19%）
d. よく手伝ってくれた（25%） 無回答（12%）

質問項目13から15は結婚前の日本での価値観と夫の家事参加の実態を聞いたものである。

これらの質問を設定したのは、戦争花嫁が結婚前に日本の古い価値観に対して嫌悪感を抱いており、そうしたものの反感を抱いている時に、レディーファーストの国からやってきた連合軍兵士が目の前に現われ、物質的な豊かさや女性を大事にするような考えに基づいた言動を目の当たりにして彼らに恋をし、国際結婚をするに至った、という考えを検証する為である。今回の調査結果は、当時の日本の家父長的封建制度が「非常に嫌だった」「嫌だった」を合計すると50%を示しており、設問作成時、筆者が予想していた数字よりも低い結果が出た。この結果については二通り考えられるのではないか。その一つは結婚当時から五十年近く経過しており、当時の率直な気持を忘れてしまい、調査時（1999年）の平均年齢の68.4歳という年齢相応に、保守的に考えるようになって、「特に嫌とは感じなかった」という項目に印をつけたことが考えられる。

もう一つは、「戦前教育を受けた戦争花嫁は古風な価値観を持っている方も比較的多く、夫への愛や精神的かつ経済的な安定を求めて結婚したのであり、日本の家父長制に対し特に嫌悪感を抱いていなかった」という理由からそのように回答した、という考え方である。筆者自身は前者の理由により、「特に嫌とは感じていなかった」という項目に印をつけた人の方が多かったのではないかと考えている。その理由として、項目15の質問に対して、夫の80%近くは何らかの形で家事参加をしていたことを調査結果が示しているからである。性役割意識に関してアメリカ的な考えを戦争花嫁自身が持っていて、「男は家事に携わらない」、「男子厨房に入るべからず」という日本的な家父長制に基づいた性役割分業の意識を結婚当時はあまり持っていなかったのではないかと、ということがこの調査から推測できる。当時の日本では若い男性が家事に参加をするということが、あまり考えにくい時代であった。そうした時代にアメリカ兵が示した言動が家父長制を是認するようなものでなかった為、結婚前の彼女たちには新鮮に映ったのではないかと。そうした彼女たちのある者は日本での結婚後、日本各地で戦争花嫁のアメリカ化促進のために設立されたアメリカ赤十字社による花嫁学校に通った（安富・スタウト、2005：30-34）。この花嫁学校では在日米軍の将校の妻らを中心メンバーとしたキリスト教女性連盟（CWA）などのボランティア教師が渡米前の戦争花嫁にアメリカ式のライフスタイルなどについて教えた（安富・スタウト、2005：191-193）。またアメリカ人の夫が生活を共にする中で逐一教え込んだ、ということもあってアメリカ入国後、メインストリームであるコア社会での性役割分業に関する適応はこの調査結果からはスムーズになされたと言える。

戦争花嫁の適応を考察する際に重要な要因の一つとして考えられる「宗教」についてはこれまでにいくつかの調査、研究がなされてきた。これは戦争花嫁の内面の問題やアメリカ社会への適応を図る一つの指標として「宗教」を捉えるからである。ここで戦争花嫁とその配偶者の結婚前と結婚後の宗教についての田部の調査についてみてみよう（田部、1962：95-122）。田部は戦争花嫁90名、夫90名に対して家庭訪問、オフィスでのインタビュー、および電話でのインタビューを行ったが、この調査によると結婚前の戦争花嫁は仏教が38%、

神教が16%、キリスト教は20%（うち14%がプロテスタント、6%がカトリック）、創価学会などのその他宗教は7%、無宗教19%となっている（田部、1962:104）。同じインフォーマント（戦争花嫁）の結婚後の宗教は「妻が夫の宗教に従った」が40%、「宗教に興味をなくした」が28%、「変わらぬ」が16%、「宗教なし・不明」が16%であった。この結果から多くの戦争花嫁が夫の宗教（カトリックなどを含むキリスト教）に改宗した（又はその宗教を受け入れた）こと、日本時代のイエズスの宗教の仏教への関心がアメリカ社会への適応と共に薄れてきていることが窺え、アメリカ社会の文化を受容してきていることがわかる。

ここで1999年に筆者がロサンゼルスで実施した調査についての考察に再び戻ってみよう。質問項目7の「最初の国際結婚の配偶者とあなたの宗教」という項目を入れて調査したところ、アメリカ在住の有効回答数78名のうちカトリック、キリスト教、ユダヤ教の総数については夫の場合は46名（60%）、調査時の戦争花嫁は25名（32.1%）であり、戦争花嫁の約1/3は夫の宗教と同じことが分かった。田部の調査では結婚前の夫の宗教でプロテスタント・カトリックは全体の70%であったが、1999年の筆者の調査では調査時で約58%となっている。勿論調査時期の違い、調査対象者が異なるということ、調査方法の違いなどがあり、単純な両者の比較検討はできないが、一般的な傾向として比較的多くの戦争花嫁はキリスト教への関心を示し、アメリカのコア文化への接近が窺える一方、夫にも当てはまることではあるが宗教への関心については時代と共に薄れてきているということが「無回答・無宗教」が夫34.6%、戦争花嫁43.6%という数字に表れている。

表1. Q.7 最初の結婚の配偶者とあなたの宗教について

(1999年の調査：n=78)

| 宗教 | 夫 | 戦争花嫁 |
|-----------------------|------------|------------|
| a) 仏教 | 3 (3.8%) | 17 (21.8%) |
| b) カトリック | 13 (16.7%) | 8 (10.3%) |
| c) キリスト教 ³ | 32 (41.0%) | 17 (21.8%) |
| d) ユダヤ教 | 1 (0.1%) | 0 |
| e) 創価学会 | 1 (0.1%) | 2 (2.6%) |
| 無回答・無宗教 | 28 (34.6%) | 34(43.6%) |

1999年の調査では食生活の変化について、「結婚後しばらく」の段階でのことと「現在の食事」ということで質問した。結婚後しばらくは子供も含めた家庭での食事、ということがあり洋食中心が44.9%となっており、「和食中心」(2.6%)や「和食がやや多い」(7.7%)の数字が非常に低い、という予想された結果を示した。この調査のインフォーマントは全米各地に居住する戦争花嫁であり、日系人・日本人の比較的多く住む地域とほとんど住んでいない地域では事情が異なることを考慮しなければならない。特に日系人・日本人の少ない地域では日本食の食材の確保はとりわけ結婚当初は極めて困難であった。子供中心の家庭生活

という理由以外に日本食があまり普及していなかったという時代背景も影響しての調査結果となっている。

一方、現在の食事となると「和食中心」「和食がやや多い」が増え、「和洋半々」を加えると50%近くになっている。また「無回答」であった戦争花嫁の実際の食生活を考えると、「和食中心」や「和食が多い」というカテゴリーに属する戦争花嫁も比較的多いと思われる。こうしたことから判断すると現在の戦争花嫁は以前に比べて和食を口にする機会が非常に多くなってきており、比較的多くの戦争花嫁の家庭では戦争花嫁の食事は家族のものとは別に自分で作るケースが多いようだ。これはアメリカ社会への適応はかなり進んでいるものの、「食べる」ということについては和食の食材が全米各地域のかなり広範囲で手に入る、という時代になった今、年齢を重ねるに従って日本食への思いは強くなってきていることを表している。

表2. Q.18 家庭での食生活について (n=78)

| | 結婚後しばらく | 現在の食事 |
|------------|------------|------------|
| a) 和食中心 | 2 (2.6%) | 8 (10.3%) |
| b) 和食がやや多い | 6 (7.7%) | 11 (14.1%) |
| c) 和洋半々 | 30 (38.5%) | 26 (33.3%) |
| d) 洋食中心 | 35 (44.7%) | 11 (14.1%) |
| 無回答 | 5 (6.4%) | 22 (28.2%) |

また「Q.20 あなたが現在所属する団体、サークルがあれば記入し、日系人会員の割合を書いて下さい」という質問に78名のうち70%の人が回答した。全体で94団体名が記入されていて、うち日系人会員の割合の多い団体、サークル名称は78団体・サークル名(83%)が記入されており、日系コミュニティとの関わり合いのほうに圧倒的に多いことを物語っている。

また「Q.24 親友3名の人種」を問う質問項目については、親友としてあげた人(180人)の人種のうち、53.9%が「日本人・日系人」と答えており、2位の「アメリカ人」(23.3%)、3位の「白人」(13.3%)を大きく引き離している。

1999年の調査で「アメリカ社会への適応」の状況を調査する質問項目はこれらのほかに「Q.17 家庭で話されていた言語」については夫との会話の場合と子供との会話の場合の二つに分けての調査、「Q.19 子供に日本語や日本文化について教えたり学ばせたりしましたか」ということで「日本語」「日本の生活・習慣」「日本の芸能」などについて調査、「Q.25 日本の新聞、雑誌、テレビなどでの日本のニュースを知りたいですか」などがあるが、その結果と分析についてはここでは省略する。

以上の調査結果を総合的に考えると戦争花嫁は「性役割分業」「宗教」などへの考え方などについてはアメリカ文化に適応し非常にアメリカ的になってきているが、「食事」「親友」

「所属サークル」などを見ると非常に日本的な考え方や嗜好が強く残っている、ということがわかる。このことは過去に日系コミュニティの中で、日系人と色々な問題があったにしても、戦争花嫁の多くは日系コミュニティ内で、日本の文化にふれたり、日本人・日系人と共に時を過ごすことの「心地よさ」を感じているのではないか。以前に比べて、日本人としてのアイデンティティが強くなり、「日本回帰」の現象が年齢を重ねるに従って、見られるようになってきたことも、その理由のひとつであろう。場面、状況といったコンテクストに応じて日本的な考え方や対応、行動になったりアメリカ的な考えをもって行動したりしていることがこうしたことから窺える。

IV. 2004年のハワイ調査を中心に（植木・安富）

IIで、三重構造を提案した。つまり、戦争花嫁の心の中には、20代半ばまで生まれ育った日本文化が基層にあり、その上に20代半ばから70代に至るまで生活した夫の国の文化が乗っている2層に、その両層が接する接触面に、テーマによりブロック状を成す第3層があるという理論である。ただし、テーマとは、宗教、哲学、政治、経済、物の考え方、躰法、人とのつき合い方、特に親戚とのかかわり方、趣味等が考えられる。このテーマごとに、ふたつの文化のパラダイムを時には意識的に、時には無意識的に、個人差をもちながら取捨選択しているのではなかろうか、という理論である。もし、もう一度彼女らを調査するチャンスに恵まれるなら、どういうテーマの時に日本的価値観で判断し、どういうテーマの時に欧米的価値観で判断するか明らかにしてみたい、という希望を書いたことがある（植木、2000：168）。

2004年10月にハワイで開催された第5回日系国際結婚親睦会に参加できるチャンスに恵まれ、このテーマ捜しを行った。ただ残念なことに、時間が限られていたので以前のようなしっかりとしたアンケート調査はできず、数名のインフォーマルな面接調査しかできなかったことを断っておきたい。それでも、いくつか判明したことがあるので報告しておきたい。

私どもは、計5名のインタビューを行った。その中でも3名は、グループ・インタビューであったので、最初にその結果をまとめて発表したい。この3名はCBTというグループを作り、他のパーティーでもそうだが、戦争花嫁国際大会でも演会の席上、日本の歌を披露してきたグループである。著者のひとり（植木）は、今回の調査に先だつ約10年前、この3名の中のひとりA女史を約3時間面接し、ライフヒストリーを聞いたことがある。A女史は、3名中で最も若く、見た目では50代の前半と言っても信じるくらいだが、実際は60代の後半である。彼女は、最初の結婚で3人の子供を産んだが、まだ子供たちが小さい時に夫が事件を起こし、それが切っ掛けとなり離婚した。分かれた夫からまったく仕送りも無く、経済的にも子育てにも苦しい中、一念発起して大学へ通い、会計士になった努力家である。ずっと独身で会計士の仕事を続け、子供3人を次々に自立させ、40数年がたち、わずか3年ぐ

らい前に再婚し、現在はやさしい夫と生活し「非常にハッピーよ！」と公言している女性である。今回の第5回親睦会の席上、彼女の原稿無しの英語による20分間のスピーチを聞いたが、彼女の英語は戦争花嫁の中ではトップクラスであり、他のBとC女史の英語は、まだ、しっかりと聞いたことは無いが、恐らくA女史の英語に比べれば劣ると推測する。A、B、C女史はトリオを作り、普段から歌とふりつけの練習をしてきているし、互いに気心の知れた仲である。

私共が質問していて、彼女らが返答してくれていたとき、ひとつ、とても面白い話題になった。3人が互いに話し合い始めたのである。A女史が、「私はとても日本人的な人間つき合いはできない」と言う。そして、そのA女史が、一番年長で、このトリオの中心的存在のB女史に向かい、「あなたは、とっても日本人的ね。いろいろと面倒なことをみてるしね………」と言う。B女史を見ると、「そうね………」と納得して頭を上下に振っている。これは長い面接の中のほんの一瞬の出来事であったが、われわれにはすべて理解できた。

このことが意味することは、B女史は、昔の日本人のように、人間関係がウェットである特質を持つということを示す。例えば、人からプレゼントをもらうと、すぐにそれ相応のプレゼントで返礼する。日本の友人から、知人がアメリカへ行くのでよろしく頼むと言われると、自分の仕事を放り出しても丁寧な接待をする。自己犠牲をとことんやってしまうタイプという意味である。それに対し、A女史は、人間関係がアメリカ人のようにドライである特質を持っている。人間と人間の関係は出来る範囲で相手に親切にすれば良いわけで、自己犠牲は一切伴わない。むしろ、伴うべきではない、と考える。なぜならば、人間は自立していなければならないわけで、相手も自立しているならば、当然ながら振る舞うべき行動にリミットがあり、相手に迷惑をかけないという最低限のルールを守ってくれるべきであり、それゆえにこちらが自己犠牲をする必然性が無いということになる。この考え方は、言うまでもなく欧米流であり、A女史はこの考え方を身につけている。英語が3人の中で最も堪能なら、人付き合い方も最もアメリカ風に順応している。もうひとりのC女史は、A女史とB女史の間にあるようだ。C女史の英語能力も、A女史に比べてどの程度かは、調べる術はなかった。

面接中に、日本人の嫌な面に話が及んだ。彼女らが言うには、「日本人はすぐに人の足を引っばる」「嫉妬心が強い」「ひとの幸せを素直に喜べない」のだそうである。彼女らが日本人と言うとき、それは日本にいる日本人を指しているのか、アメリカにいる一世や二世日系人なのか、あるいは、彼女たち戦争花嫁自身を意味しているのか、今ひとつ明らかではない。そこで、この点を質問すると、いわゆるアメリカ人と比較してなので、これらの人々をすべて含むそうである。

日本人は外国へ来ると特にそうなのだが、集団で行動することになる。言葉のハンディがあり、心細さ、自信の無さ、相互扶助、自己防衛を兼ねての行動である。それゆえに横一線平等が前提となり、ひとりだけが目立つ行動をとると、「足並みが揃わない」「自分だけ目立

ちたがり」「抜け駆け」であり、パニッシュメントの対象となる。有力メンバーから、中傷、悪口、批判され、その結果、グループから村八分となり、排斥され、のけ者となる。だから、そうなるのが怖くてリーダーの顔色を伺い、敢えて自立しようとはせず、時の経過を横目で見ながら、リーダーが年をとり病気となり、自然に脱落するのを待って、自身がグループの長になる。経験もあり、最年長でもあり、誰からも文句を言われず、しかも、このトップのポジションは「柁」によって守られている。あとは、自分の健康との競争であり、動けて喋れる限り、前任者がそうであったようにリーダーの地位から離れようとはしない。金と異性とのスキャンダルが無い限り、自分は半永久的にリーダーの地位に居座り続けられる居心地の良いポジションである。リーダーシップを持っているかいないかは、一切関係なく、終身リーダーとなれるのだ。ただ、この段落の後半は、A・B・C女史たちが言ったわけではなく、前半に続けて筆者が日本の組織の特性を語っただけである。

ひとつ、彼女たちから面白いことを聞いた。大正時代の終わりから昭和の初めにかけて移民した一世たちは、比較的時間にルーズであると言う。年長者だからだ、という考えもあるが、まだ体がシャキッとして性格も厳格なのに、時間となるとかなりいい加減になるそうだ。1時にコミュニティー・センターで集合と決めても、守る人はほとんどいない。一世たちは、広島、和歌山、熊本、福島等といった各県でも農村出身者が多く、明治・大正・昭和のはじめの感覚を引き摺っているのであろうか。これに比べて戦後一世の戦争花嫁たちは、時間はぴったりと合わせる方々が多いそうである。これは、アメリカへ来て、アメリカ流に文化適応した結果であるのか、それとも、女性戦後移民一世の特質なのか、今ひとつ定かでない。

夫は軍人、あるいは、軍属であったため、そして、その夫の影響も受けているので、彼女たちは愛国心には同年輩の日本人女性と比べて強いものがある。アメリカへ移住した後、国籍取得の際に宣誓したわけで、アメリカ国家、それを象徴する星条旗に対する忠誠心には、軍人の夫に負けないものがある。ただし、戦争となると話は別になる。まず、夫とは、第二次世界大戦の話はほぼしない。しかし、ベトナム戦争は子供たちが係わったので話すことがある。湾岸戦争と今回のイラク戦争は、共和党大統領が推進したわけで、党员である夫と、戦争はいやで民主党に登録している戦争花嫁との間で論争がある。アメリカの軍人家族は、圧倒的に共和党員が多いのだが、戦争花嫁の中には民主党員も多いのではないかと推測している。この政党支持も、一般アンケート調査で質問すべきであったと反省している。

次にDさんの事例を考えてみよう。上記CBTの3人や、本項の最後に紹介するE女史とは異なり、Dさんは典型的なごく普通の戦争花嫁であり、表舞台に出てエンタテイナーとして発表したり、大きな組織のリーダーとして活躍する、というタイプの女性ではない。1999年にロサンゼルス郊外で開催された「第三回国際結婚交流世界大会」に筆者（安富）に誘われて初めて戦争花嫁の会合に参加した女性であり、「戦争花嫁」という言葉の使用については4～5年前までは躊躇し、その言葉が使用される状況によっては反発するようなことが時として見受けられた。それまでのDさんは「戦争花嫁」という言葉の代わりに「国

際結婚した人」という言葉で表現し、同じ境遇の仲間同士での会話でも、「戦争花嫁」ということばを使うことは全く無かった。Dさんを30年近く前から知る筆者にとっては「戦争花嫁」という言葉を躊躇することなく口にする現在を考えると、こうしたDさんの「戦争花嫁」としてのアイデンティティの変化については感慨深いものがある。

北海道出身で76歳のDさんは、1955年に福岡でイタリア系アメリカ人と結婚した。1916年生まれのご主人は幼くして両親と共に移民としてアメリカに渡り、その後アメリカ軍に入隊し、朝鮮戦争で福岡に駐留していた。そこでご主人と知り合い、結婚した1955年には長男を、翌年には長女を出産した。1956年にご主人の転勤に伴い、一家は渡米したが、その後1959年にはご主人が再び日本勤務となり家族4人で日本に戻った。この頃は二人の子供は日本語会話も出来る程度であり、経済的にはまだ貧しかった日本では米軍家族としてメイドを雇っての恵まれた生活をしていて、と述懐している。1963年にご主人がテキサス州に配属されて再渡米し、翌年カリフォルニア州ロングビーチに移住し、その後今日に至るまで同地で生活している。

退役後の生活を考えると、ご主人は1965年からはロングビーチで「K's Burger」というハンバーガーショップとクリーニング店数店舗を経営し、Dさんもアメリカ人の使用人を雇い、その後20年近くこれらの店を夫婦で切り盛りしてきた。明るく元気で、ある面ではアッケラカンとしているDさんは、1997年にガンで死亡したご主人は勿論のこと、お二人のお子さんやその家族とは英語で会話をしている。しかしご自身でも「英語は苦手」とおっしゃるように、込み入った話は渡米後50年近く経過した今でも難しいとのこと。英語でのペーパーワークもすべて今では2人のお子さんにやってもらっている。

筆者と知り合った1977年頃は、ハンバーガーショップなどの経営で、早朝から店の鍵を閉める夜まで大変忙しく働いていた時期であった。また、趣味の詩吟サークルなどの戦争花嫁の仲間同士で集まってお互いの家などでおかずを持ち寄って食事をしたり、日系人の経営のピアノバーで日本の歌謡曲や民謡、詩吟といった曲を歌って楽しんでいた時期でもあった、とのことである。

家での食事は和洋半々で、特にカリフォルニア州に移り住むようになった1964年以降はカリフォルニア産日本米や日本のおかずも毎日のように食卓を飾るようになった。長女の結婚、ご主人の死を経て、今日では長男と2人で日本食メインの食生活を送っている。毎日TVの日本語放送や羅府新報(日本語面を)で日本の情報を得て、趣味の詩吟、カラオケ、書道・墨絵といった日本人のサークル(戦争花嫁主体の戦後派一世と帰米二世が会員)での活動に励み、同じ戦争花嫁の友人などとの電話での会話も楽しみの一つである。

前述のCBTの3人のうちではB女史のタイプであるDさんは非常に日本志向が強く、世話好きのお人好しで、情に厚く、典型的な世話好きタイプの日本女性である。ただ食事などで相手をもてなす場合、満腹だったり、体調のためオカズやごはんを少しでも残すと、「アレッ、これが嫌いになったの?」とか「これおいしくなかったの?」とおっしゃり、相手が

出されたものをすべて食べることを暗黙のうちに期待（又は強要）する、といった日本でも中高年女性には見かけることのあるタイプである。亡くなったご主人は名前だけのカトリック教徒であったが、Dさんは無宗教である。ただ居間にはDさんの両親の位牌が飾られていて、日本に帰国するときは必ずといって両親の墓参りをし、ご主人の命日前後には長男などと共同墓地に行って献花するのは欠かさない。

このようにあくまでも日本的な価値観が非常に強いDさんであり、英語も恐らく今回インタビューした他の4人に比べても最も劣ると思われ、交友関係も娘家族以外は全くといって良いほど非日系のアメリカ人とは付き合わない生活を送っている。しかしだからといって同年齢の日本在住の日本人女性と価値観などで全く同一のものを共有しているか、ということそれは違う。共和党支持で「強いアメリカ」を願って非常に保守的な考えを持っていた亡きご主人の影響もあり、アメリカへの愛国心は非常に強い。共和党の超保守派支持の同居の長男ほどではなかったが、「9.11」のテロ発生のときロングビーチのDさんのお宅で過ごしていた筆者は、アメリカ軍人の妻であったDさんがいかにアメリカへの愛国心が強く、ブッシュを支持しているかを思い知らされた。色々と周囲に気を使わなければならない日本は彼女にとっては何年かに一度、短期間訪問し滞在するところであり、決して永住するところではない。Dさんにとって「心地よい」と感じるのは、日本人・日系人が多く住み、日本食や日本文化へのアクセスの容易な西海岸地域で、近所付き合いなどでの他人の目を気にすることなく、地元（に近い）プロ野球チームの「ダジャーズ」の活躍にTVの前で一喜一憂し、米語のスラングで相手チームやミスをした「ダジャーズ」選手を罵る……、といった時ではないか。そんなDさんもまた、まさしく「多様なアメリカ人」の一人である。

最後に全米やオーストラリアに在住する戦争花嫁全体の親睦団体の会長であるEさんの事例を検討してみよう。現在73歳のEさんは1953年に結婚し翌年渡米した。19歳まで山形県の農家で過ごし、ここで体験し、養われた価値観が現在に至るまで大きく影響を及ぼしている。両親への感謝の念、皇室への尊敬の念、権威への同調や尊重、服従などといったことはこの世代の日本人女性の多くが共有する価値観であるが、Eさんの場合はこうした傾向が特に顕著である。農家の地主でもあった父が青年時代に「昭和天皇の結婚式典の際に近衛兵として警護をした」ということがEさんにとっては誇りであり、心の支えとして生きてきた。

Eさんの場合、1954年に渡米後はご主人の勤務の関係でオハイオ州、ケンタッキー州と日系コミュニティが存在しなかった中西部や南部の陸軍基地で生活（1956年から1959年までは勤務の関係で一家は日本で生活）していたため、アメリカ社会そのものの中に入って生活した。そのため自然と日本人や日系人以外の一般のアメリカ人との交友関係が主体となり、否が応でも英語での生活を余儀なくされた。生来、生真面目で、自立心が旺盛で勝ち気で頑張り屋であるEさんは懸命になってアメリカ社会に適応しようとし、「日本人であるから」ということで馬鹿にされないように努力した。

Eさんの精神構造の基底には幼時期から青年期に習得した日本的な価値観がアメリカでの生活においてもしっかり根付いてはいるが、子育てや1964年頃から近くの牧場に勤務するようになったこともあり(25年間勤務)、日常の生活では必死に「アメリカの妻・母親」として、また働く女性として頑張ってきた。子供の服はすべて自分で作り、無駄遣いはせず、家事は勿論、自宅の畑、家畜の世話や農場での仕事をこなしてきた。また英語に関しては日本の教育機関で正式に学んだことはなかったが、発音の問題は別にしても英語の理解力や運用能力も一般の戦争花嫁に比べて極めて高く、これまでに地元の新聞に英文の記事を何度も投稿しており、ここで事例を紹介したほかの4人の中では最もアメリカ社会への適応を果たしている女性であると言えよう。前出のDさんの場合、英語の新聞は一切読まず日系紙『羅府新報』の日本語面のみ読み、TVも「ダジャーズ」の試合のときのみ一般のチャンネルを見るが、その他はすべて日本語放送のTV番組を見るのに対し、Eさんの場合、新聞は地元紙(英語)のみを購読し、時には英文のエッセイを投稿する。またTVは一切日本語TVは見ず夫と共に野球のみならず一般のチャンネル(英語)を見て楽しむ、というライフスタイルとなっている。

1960年から日本人・日系人のコミュニティがあるシアトル近郊での生活が始まり、その頃から日系人や日本人との交友を持つようになった。忘れかけた日本語のブラッシュアップも兼ねて川柳の会に入り、日本人・日系人の友人も更に増えるようになった。そこで戦争花嫁が日系コミュニティでいかに見られているかを初めて知り愕然とし、「このままではアメリカ社会で必死に生きてきた戦争花嫁は死んでも死に切れない。戦争花嫁への偏見が日本や日系社会からなくなるように、戦争花嫁も声をあげるべきではないか」と強く思うようになった。そこで当時の美智子皇太子妃から戦争花嫁への励ましの言葉をかけてもらったこともあり、全米の戦争花嫁に戦争花嫁の親睦会の結成を呼びかけた。⁴そして戦争花嫁の会を立ち上げるべく発起人となって活動し、最終的には「日系国際結婚親睦会」を発足させ、発足後は強いリーダーとして活躍し、時として強引とも受け取られかねないようなやり方で会を運営してきている。強いリーダーシップを発揮し、自宅を親睦会の本部事務所として使い、コピー機2台をフル回転させて一人で『ニューズレター』を編集・印刷し、1日に何度もかってくる会員からの電話に相談相手として応答している。

ある面では非常にドライに考え、行動するが、「義理・人情」には厚く、すぐ涙を流し、困った会員を何とか救おう、助けようと尽力する。昨年前述の親睦会の会計報告について象徴的なやり取りがあったのでEさんのメンタリティーに残存する「日本的な価値観」を露呈させた事例として最後に紹介する。

上記親睦会は発足して11年になり、現在では年会費20ドルを徴収して活動し、ワシントン州にも同会は非営利団体として登録している。しかし昨年度まではEさんの親睦会の会計報告をしていなかった。Eさんにしてみれば、400名を越える会員から年会費を頂いても、結局はコピー代(年間5~6回『ニューズレター』をアメリカ・オーストラリア・日本な

どの会員に送付)、通信費などの会の運営費では賄いきれず結局は自分の持ち出しで会計を処理している、という思いもあり(コピー機2台は共にEさん個人の所有物)、いちいち会計報告をしなくても自分が不正をやっている、などといったことは会員全員が思わないだろうし、会計処理が面倒である、ということもあって会計報告をしなかつた。ところが一部リーダー的な会員から「会員から会費をもらって会を運営しているのだから会計報告をしないのはおかしい」とクレームがつき、これに同調する声もあって結局その年から会計報告を『ニューズレター』に掲載するようになった。会員への報告義務、という点では本来あるべき姿に戻ったわけであるが、Eさんにしてみれば、自分がいちいち説明しなくとも、自分が会のためにやっていることはみんなが分かっているだろうし、そうしたことへの「暗黙の了解」がある、と思っていた。こうしたことにも非常にアメリカ的にドライにものを考えるところがある反面、非常に日本的なメンタリティが窺える。

おわりにかえて

戦争花嫁の先行研究を踏まえ、戦争花嫁のアメリカへの適応を考える分析枠組みとして、本多(1991)が日系アメリカ人の適応を考察する際に当てはめた「コンテキスト(context)」、「エスニシティ(ethnicity)」、そして、その両方の概念を見据えての「ストラテジー(strategy)」を念頭に置いた分析を援用し、われわれは、1996年以降継続してきた調査の結果を検証した。その結果、戦争花嫁の価値観については、結婚前までの日本での生活で身につけた古風な「日本的価値観」がその基層に存在し、日本文化や日本的価値観を基盤とした日本への帰属意識、日本人としてのエスニシティ(ethnicity)やアイデンティティ(identity)に根を下ろした生活を送ってきた、ということを示した。「コンテキスト(context)」としては、1950年代に渡米した際の保守化傾向のあったアメリカの社会状況、差別・偏見の目で見られがちな日系社会からの状況といったものが渡米当時あったが⁵、アメリカ社会の文化や価値観が50年以上に渡る在米生活で培われ、ある意味では非常にアメリカナイズされた言動を自然と身につけ、いわゆる「欧米的価値観」が上層に乗る、という二重構造となっていることを明らかにした。

この二重構造の枠組みの中で、戦争花嫁は、状況やテーマに応じて日本的な価値観が色濃く出る場合と、欧米的価値観が強く出る場合とを使い分ける「ストラテジー(strategy)」を身につけてきた。日本的なものとの表出の度合いは、戦争花嫁がそれまでに体験してきたことや英語力などにも大きく影響されるが、テーマによってブロック状になり、上層と下層の間に中間層を構築するという、三重構造になっていることを、我々は調査票とインタビューによって明らかにした。

今後は更により多くの戦争花嫁へのインタビューや一次資料の詳細な検討を通し、果たしてこのテーマはいくつあるのか、それぞれのブロックにおいて彼女らの傾倒度はどの程度な

のか、どのような状況や場面で、またどのようなテーマのときにブロック状の接触面に特質が表出するのか、といったことを研究の課題とし、戦争花嫁のアメリカへの適応問題について他の異人種間結婚をした女性との比較検討も加えて解明していきたい、と希望している。

注

- ¹ 本研究は平成16年度嘉悦大学特別研究費の助成による研究成果の一部を纏めたものである。
- ² ただ一人の回答者は「今回は趣旨もよく理解しているのでこのままで結構ですが、最近こうした質問は問題となることがありますよ」と調査用紙に書いてくれた。
- ³ 「キリスト教」のカテゴリーにはプロテスタント各宗派をはじめ、記入欄に「キリスト教」と記入した回答が含まれている。
- ⁴ 1984年5月、海外日系人大会25周年記念大会にワシントン州オリンピア地区JACL（日系アメリカ人市民協会）代表の名目での参加し、当時の美智子皇太子妃から戦争花嫁のアメリカでの生活の苦労に対し、ねぎらいの言葉をかけられた。
- ⁵ 戦争花嫁と日系コミュニティについては拙稿の『戦争花嫁』と日系コミュニティ（Ⅱ）：ステレオタイプに基づく排斥から受容へ『嘉悦大学研究論集』、78号、2000年、45-61頁及び『戦争花嫁』と日系コミュニティ（Ⅲ）：ステレオタイプに基づく排斥から受容へ『嘉悦大学研究論集』、81号、2002年、55-82頁などに詳しい。

参考・引用文献

- Connor John W., *A Study of The Marital Stability of Japanese War Brides*, San Francisco: R & E Research Associates, Inc., 1976.
- Kim, Bok-Lim C., "Asian Wives of U. S. Servicemen: Women in Shadows," *Amerasia* 4:1 (1977), pp.91-115.
- Schnepp, Gerald J. & Yui, Agnes Masako, "Cultural and Marital Adjustment of Japanese War Brides," *American Journal of Sociology*, LXI (61), (1955), pp.48-50.
- Strauss, Anselm L., "Strain and Harmony in Ameican-Japanese War Bride Marriages," *Marriage and Family Living* (May 1954), pp.99-106.
- 江成常夫、『花嫁のアメリカ』講談社、1981年。
- 本多千恵「日系アメリカ人の適応に関する一考察～『成功物語』再考～」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要31号』、1991年、9～19頁。
- 新田文輝、「海を渡った日本女性－戦争花嫁再考－」『吉備国際大学社会学部研究紀要7号』、1997年、165～175頁。
- 、「面接調査分析」『海を渡った花嫁たち』植木武、2000年、145～159頁。
- 鈴木一代、「性格分析」『海を渡った花嫁たち』植木武、2000年、93～144頁。
- 田部俊子「日本人の戦争花嫁の問題」『北星学園大学文学部北星論集1』、1962年、95～125頁。
- 安富成良、スタウト・梅津和子『アメリカに渡った戦争花嫁～日米国際結婚パイオニアの記録』、明石書店、2005年。
- 植木 武、「海を渡った花嫁たち(Ⅲ)(1)マスコミに映った“戦争花嫁”像」第72回日本社会学会報告要旨、1999年、197頁。
- 、『海を渡った花嫁たち－戦争花嫁のプロフィール－』平成8年度～平成10年度科学研究費補助金(国際学術研究) 研究成果報告書. 課題番号 08041084、2000年。